



コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス
教材の開発

-ダンスの芸術表現を用いたコミュニケーション能力
の育成に資する取組の推進-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2014-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, るみ子, 豊福, 彬文, 野邊, 麻衣子, 石本, 愛, 野邊, 壮平, Toyofuku, Akifumi, Nobe, Maiko, Ishimoto, Ai, Nobe, Souhei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5794

コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス教材の開発 ～ダンスの芸術表現を用いたコミュニケーション能力の育成に資する 取組の推進～

高橋るみ子・豊福彬文*・野邊麻衣子**・石本 愛***・野邊壮平*

Dance Teaching Material for Contributing to Enhance the Improvement of Communication Skills through Artistic Expression - Promotion of Activities for the Improvement of Communication Skills using Artistic Expression of Dance -

Rumiko TAKAHASHI Akifumi TOYOFUKU* Maiko NOBE**
Ai ISHIMOTO*** Souhei NOBE*

1. はじめに

本研究は、「ダンスの芸術表現を用いたコミュニケーション能力の育成に資する取組の推進」(科学研究費助成事業, 基盤研究C, 平成24年度～27年度, 課題番号2450070)として取り組んだ実践研究の一つである。

「ダンスの芸術表現を用いたコミュニケーション能力の育成に資する取組の推進」の目的は、日本の舞踊教育に根強く存在する問題が研究動機の発端となっているが、研究着手(平成24年度)のきっかけは、芸術家等の雇用促進を図る文部科学省の「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」(以下、「コミュニケーション能力向上事業」という。)とその特色—演劇やダンスに特化した事業であること、芸術家等と教員が連携して国語、体育、総合的な学習の時間などの教科や活動に芸術表現体験活動を効果的に結びつけたワークショップ型の授業を実施すること—である⁽¹⁾。そこで、この文部科学省の取組を、体育・保健体育に位置づけて推進することを通して、結果として、今般の学校現場における「創作ダンス」(小学校の「表現あそび」と「表現」を含む)離れに歯止めをかけたいと考えた。これが研究の動機・目的である。併せて期待したのは、アーティスト(振付家・ダンサー)を学校へ派遣し、その振付家・ダンサーと教員が連携してワークショップ型の授業(創作ダンス)を実施することで、コンテンポラリー・ダンスや振付家・ダンサーが子どもたちの日常(身近な存在)になることである。

そこで、この研究の目的を達成するために3つの課題を設定・解決した。第1の課題は、学校(又は教員)と芸術家等とをつなぐことができるコーディネーターの育成である。第2の課題は、学校へ派遣された芸術家等と連携・協働することができる—芸術家等と対等に交渉する力量や、外部講師の実技指導等を指導計画に位置づけることができる授業力をもつ—教員の育

*んまつーボス・NPO法人MIYAZAKI C-DANCE CENTER

**宮崎大学教育文化学部附属小学校

***日向市立平岩小学校

成である。そして、第3の課題が、コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス教材（以下、「芸術表現教材」という。）の開発である。本論では、この内の第3の課題の解決について報告・考察する。

なお、3つの課題を解決するために、平成24年度から平成27年度までの4年間に、県外15校を含む119校（のべ数）において、体育・保健体育の授業に、芸術表現体験活動を効果的に結びつけたワークショップ型の授業（創作ダンス）を実施した。内訳は、小学校71校、中学校34校、小・中学校8校、高校2校、特別支援学校4校である（数字は「のべ数」）。県外の実践校は、福島県、東京都、埼玉県、岐阜県の1都3県である。また、県内外で多数の実践を行うことができたのは、国（文部科学省・文化庁）から委託を受けたNPO法人等が、学校における文化芸術のニーズを把握して、芸術家を派遣する取組「コミュニケーション能力向上事業」（コーディネーター実施方式）⁽²⁾と、「芸術家の派遣事業」（特定非営利活動法人等実施分）⁽³⁾のそれぞれの委託NPO法人に、舞踊学研究室が立ち上げたNPO法人MIYAZAKI C-DANCE CENTER（代表理事：野邊壮平、以下「NPO法人MCDC」という。）が採択されたことによる。応募に際し、NPO法人MCDCがコーディネートする組織—「運営」はNPO法人MCDCが行い、宮崎県教育委員会が「監督」する。また、教科教育の大学教員で構成するプロジェクト総括評価委員会（教育文化学部附属教育協働開発センター）が「評価」を行い、教育フォーラムにおいて外部評価を受ける—を構築した。

2. コミュニケーション能力等の捉え方

本論では、「コミュニケーション能力」「ワークショップ型の授業」「芸術家等」については、文部科学省のコミュニケーション教育推進会議審議経過報告「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組から」⁽¹⁾の捉え方に準拠する。

まず、「コミュニケーション能力」の捉え方については、『「コミュニケーション能力」の捉え方については様々あると考えられ、一様に定義できるものではないが、コミュニケーション教育推進会議（教育WG）では、子どもたちをめぐる現状や課題、そして新しい学習指導要領の考えなどを踏まえ、コミュニケーション能力を、いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互理解を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話（情報や価値観を共有していない相手との言葉による交流）をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力と捉え、多文化共生時代の21世紀において、このコミュニケーション能力を育むことが極めて重要だと考える。」とした。

また、「ワークショップ型の授業」の捉え方としては、「参加・体験する中で学習する指導方法」であり、「グループ単位で協働して、正解のない課題を創造的・創作的に取り組む活動を中心とするワークショップの手法を取り入れた授業」とした。「芸術家等」の捉え方としては、特有の技能「グループ活動において、他者認識や自己認識を助け、コミュニケーションを促進させたり（ファシリテーターの専門家）、非言語コミュニケーションや即興的に対応したり（クリエイターの専門家）することにたけている」をもつ、「ワークショップの理論や手法を備えている（省略）表現活動の専門家」とした。

3. 芸術表現教材（仮称）の開発

第3の課題—芸術表現教材の開発—を解決するために、高橋と豊福、野邊（壮）のそれぞれの専門性（舞踊教育、情報教育、美術科教育）を活かし共同した。そして、情報機器やアートを効果的に活用した、子どもたちの言語活動をより充実させるダンス教材を開発した。また、石本が、開発した芸術表現教材を活用した体育の授業実践を行い、その効果を実証した。野邊（麻）の授業実践は、平成27年度宮崎大学教育文化学部附属小学校公開研究会にて行う（平成28年2月5日）。

1. ダンス教材「気がつきゃほら！ダンス」シリーズ

高橋とんまつーポス（振付家・ダンサー）、そして現職教員の野邊（麻）らは、これまでも、実践研究を通して、種々のダンス教材を共同で開発し、「気がつきゃほら！ダンス」シリーズ⁽⁴⁾として、学校現場に提供してきた。

この「気がつきゃほら！ダンス」シリーズは、次代を生きる子どもたちが、時代の変化に対応できるよう、ダイナミックなコミュニケーション（他者と協調する力）、模倣する力（観察力）、想像力、表現する力、創造的・創作的に取り組む力（の内の一つ、あるいは複数）の育成を図ることを目的とした多様な教材で構成されている。また、「気がつきゃほら！ダンス」シリーズは、シリーズ名の通り、限られた時間（授業時間や単元）の中で、いろいろな価値観や背景をもつ子どもたちが、表現（者）を楽しむことができるような仕掛けや、振付家・ダンサーと直接に関わるできない子どもたちと教員が、容易に、表現の世界を拓くことができるような仕掛けをもつ教材（後述）で構成されている。

さらに「気がつきゃほら！ダンス」シリーズは、子どもたちが、a. 言語に例えると単語にあたる意味・機能をもつ「動きの単語」を体験する教材、b. 動きの単語が結ばれて、あるまとまった表現性をもつ動きのくぎり「動きの語句」（フレーズ）を体験する教材、c. 動きがいくつか集まってまとまり、意味内容をあらわすよう構造化されたひとくぎり「動きの文章」（センテンス）を体験する教材、そして、d. 内容をそなえ、感情をそなえ、動きとイメージの一致した表現形式としてまとまりをつくる、作者の傾向や特徴をそなえた「作品」の上演を体験する教材等で構成されている⁽⁵⁾。図1は、平成24年度～27年度までの4年間に開発した「気がつきゃほら！ダンス」シリーズの教材を分類し、それらの教材が育成しようとする能力との関係性を示したものである。

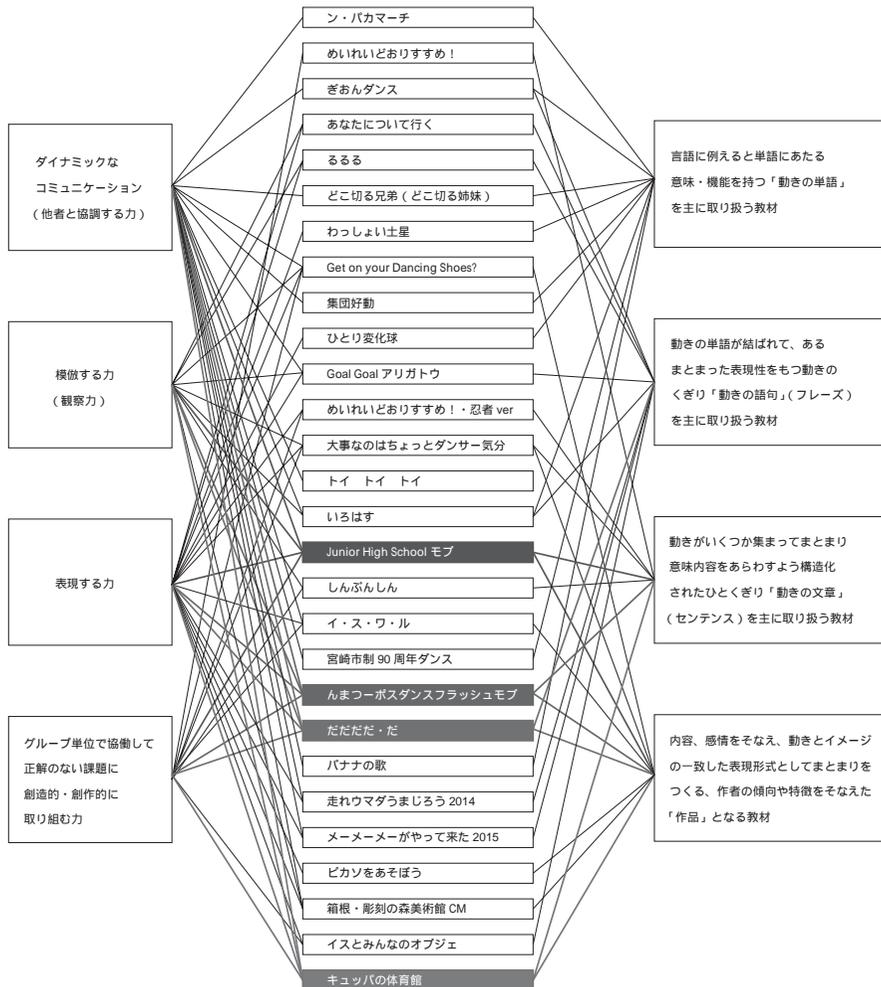


図1 「気がつきゃほら!ダンス」シリーズの教材と育成しようとする能力との関係性
(作図:高橋 豊福 野邊(麻) 2016)



写真1:「イスとみんなのオブジェ」(平岩小中)



写真2:「だだだだ・だ」(いわき市立湯本第三小)

- 芸術表現教材「㉑だだだだ・だ」は、ダンス教材「③ぎおんダンス」の言語活動（前述）に、グループ間での話し合いを通して互いのグループが踊る場所（例えば、校門の前、職員室等）を調整して決める活動を加えて、言語活動をより充実させた。課題として、情報機器を活用した映像作品をクラスで作成する活動を設定した。
- 芸術表現教材「㉘キュッパの体育館」は、前述の芸術表現教材「㉑んまつーポストダンスフラッシュモブ」の言語活動を発展させ、事前に予告して、話し合いに参加するための素材を集めさせたり、クラス全員で批評し合う活動を加えて、言語活動のさらなる充実を図った。素材として、展覧会「キュッパのびじゅつかんーみつめて、あつめて、しらべて、ならべてー」（東京都美術館）と絵本「キュッパのはくぶつかん」を用いた⁽⁸⁾。

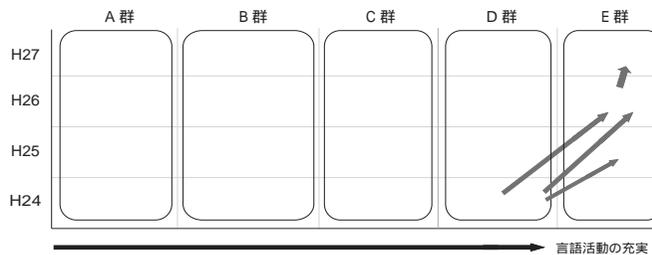


図2 言語活動の充実⁽⁹⁾の観点からのダンス教材及び芸術表現教材の分類図（作図：豊福 2016）

平成24年度から27年度の4年間に開発した「気がつきゃほら！ダンス」シリーズの教材は、大きく分けて5つに分類することができる（KJ法）。中でも特に話し合う活動を効果的に仕組んだ教材がD群とE群である。また、E群の教材は、D群のそれと比べると、言語活動がより充実するように、情報機器やアートを活用した教材（前述）となっている。その点で、これまでの「気がつきゃほら！ダンス」シリーズの教材と差別化を図っている。

ただし、B群、C群の教材は、「からだ語りかけてくる」や「からだは感情をかくしもっている」⁽⁵⁾等に気づくことができる体験を拓くための教材である。これらの教材は、非言語コミュニケーションを育成するという意味で必要不可欠である。なぜならば、子どもたちが、様々な表現手法を用いて、相互の伝達を図ろうとする意欲を高めることができるからである。

リズムを介したダイナミックなコミュニケーションを体験するA群の教材とともに、B群、C群の教材は、対話や話し合い等、ことばによる表現活動を越えた「からだ語り合う世界」⁽⁵⁾が出現していることを、子どもたちに感受させることができる。これが、中央教育審議会答申（平成20年1月17日）の教育内容に関する改善事項（1）言語活動の充実において、「対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと」と明記される所以である⁽⁹⁾。

4. 芸術表現教材の指導案例

野邊（麻）が公開研究会（前出）において実施する、芸術表現教材を活用した授業の指導案を以下に示す。

この指導案を作成するにあたり、石本が日向市立平岩小中学校の第4学年を対象に取り組んだ「キュッパの体育館」を先行実践とし（後述）、野邊（麻）が中心となり、高橋と豊福、野邊

(壮) が加わりフォローアップを行った。

第2学年3組 体育科学習指導案

授業提案者 野邊 麻衣子

1 単元の目標

F 表現 リズム 遊び ア	【運動についての 関心・意欲・態度】	いろいろな仲間と踊ったり、進んで身体で表したりしている。
	【運動についての 思考・判断】	題材の特徴を捉えた動きを選ぶことや、「かっこいい」仲間を見付けたり、どこが「かっこいい」のかを伝えたりすることができる。
	【運動の技能】	写真の動きの特徴を捉え、模倣することができる。

2 単元名

キュッパ*の体いくかん (表現遊び)

* 絵本『キュッパのはくぶっかん』(福音館書店)の主人公。身の回りのものを拾い集めることが好きな丸太の男の子。

3 単元について

本単元は、いろいろなリズム遊びや表現遊びを楽しむことをとおして、コミュニケーション能力の育成に資することをねらいとしている。

本単元のメインの題材は、新聞に掲載されているスポーツの写真(宮崎日日新聞を切り抜いたもの)である。自分や仲間が集めた、それらの多種多様な写真を思い思いに分類したり、模倣したりして遊ぶ。遊びながら、特徴を捉えるということを理解し、自然に身体で表すことを楽しめるようになる。本単元は、写真がどのように分類されるのか、身体で表すとどのように見えるのか、子どもも教師も分からないというところがおもしろい。他領域の運動にはない、表現の特性に十分ふれることができる単元である。

本単元を学習することは、遊びをとおして表現のおもしろさを味わいながら、正解のない課題を解決する力を育成することができ、大変意義がある。

4 子どもについて

子どもは、第1学年「夜の動物園」で、動物のように見えるダンサーの写真の動きを模倣して、夜の動物園を表現する学習を行った。今年度は「リズム遊び」で宮崎をテーマにしたダンス等を踊り、リズムによって動くことの楽しさを味わった。

体育科学習においては、仲間と動き方を考える、動きを観る、助言する等をしていくことで、運動ができるようになると実感している子どもが多い。さらに、一人一人ができるようになることが、学級の運動する力を高めることにつながると感じている子どもも増えてきた。「Aくんが教えてくれたからできた。」「Bさんの考えをやってみたらできるようになった。」等のふりかえりが多く聞かれることから、学級に「仲間と運動するよさ」が広がっていると感じている。その一方で、できたという経験が運動の自信につながらず、仲間との運動に積極的でない子どもがまだいる。

5 本実践の主張【研究内容との関連】

1-1) 「できるような気がする」段階の運動指導の在り方

右図のように真正面を向いて模倣する子どもがいるのではないかと予想される。

それを、より「かっこいい」模倣にするために、次の2つの手立てを講じる。

- ① へそと顔の向きをずらしている仲間を観察させ「〇〇くんはどこを見ている?」と問い、顔の向きを変えると「かっこいい」ことに気付くきっかけをつくる。
- ② 「ボールが飛んだ方を見て!」と助言し「顔の向きが変わったのがかっこいいね。」と称賛する。



2-2) 正解のない課題を仕組む

本単元の主な学習活動は、集めた写真を分類することと、模倣することである。「どのように分類するか」「どのように模倣するか」=「正解のない課題」である。つまり、分類する活動では「こう分類すべき」というものはない。模倣では、同じ写真を選んだ2人が、必ずしも同じ向きである必要はない。むしろ、自分たちならではの根拠ある分類や、「〇〇くんと同じ写真だけど、ぼくは向きをちょっと変えてみたよ。」という工夫を価値付けたい。また、これらの活動の過程で、仲間との必要感のある対話が生まれ、課題を解決することができる。

6 指導計画（5時間）

- (1) 「リズムあそび」や「まねっこあそび」を楽しむ。_____ 2時間【関・意・態】【思・判】【技能】
 (2) スポーツの写真で遊ぶ。_____ 3時間
 ・ 写真を分類する。…………… 2【関・意・態】【思・判】
 ・ 分類されなかった（使わなかった）写真を模倣する。…………… 1（本時）【思・判】

7 本時の目標

「カッコいい」仲間を見付けたり、どこが「カッコいい」のかを伝えたりすることができる。

8 指導過程

学習活動及び学習内容	教師のかかわり
<p>1 「リズムあそび」や「まねっこあそび」を楽しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ リズムあそび <ul style="list-style-type: none"> ・ 『太陽の町、宮崎』他 ○ まねっこあそび <ul style="list-style-type: none"> ・ ピカソの絵画 <p>2 本時の学習を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 運動の課題 <p>つかわなかったしやんであそべるかな。</p> <p>3 動きを模倣する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 写真の選択（3枚）と模倣 <p>① → ② → ③</p> <p>4 光の中で、動きを模倣する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 3つの動きを連続で ○ 1つに絞って <p>5 学習をふりかえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 鑑賞 <p>「何か、いい…」「後ろに影ができていいよ！」 「〇〇くんの真似が、カッコいい！」等</p> ○ 感想 <p>「体の向きを変えると、影もかっこよくなっておもしろかった。」 「使わなかった写真でこんなにおもしろいことができるなんて、思わなかったなあ。」等</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業開始と同時に、子どもとともに親しみのある作品を踊り、非日常的な表現遊びの空間を創りたい。 ○ 絵画を提示し、模倣させる。提示する際に、1つ1つをテンポよく提示することで、パッと特徴を捉え模倣することができるようにする。 ○ 使わなかった写真を提示し、その理由を問う。子どもの「必要なかったから。」等の反応を引き出し、前時までは価値をおいていなかった写真であったことを確認する。これにより、学習後の「前の時間には必要なかった写真で、こんなにおもしろいことができた！」という思いが生まれることを期待したい。 ○ 写真の動きの特徴を捉え、どの子どもも楽しみながら模倣できるように、次の手立てを講じる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 3枚選んだ写真を、模倣したい順に並べさせる。 ・ 模倣するタイミングをテンポよく出す。 ・ 写っていない所を創造している姿を称賛する。 ○ 光の中では多くの子どもが真正面を向いているだろう。しかし、少し斜めを向く子どももいると予想する。真正面を向いた教師と対比させることで、身体の向き異なる2人のよさに気付けるようにする。また、自分の身体の向きを考える機会としたい。 ○ 「3つの写真を1つに絞る時は、仲間が選ぶ。」と前もって知らせる。そうすることで、仲間の動きをよく観たり、選ぶ写真について話し合ったりできるようにする。 ○ 仲間の動きを観ている子どものつぶやきを拾い、光の中の子どもに伝えさせたり、全体に伝えたりすることで、動く方も観る方も、より「カッコいい」動き方について意識することができるようにする。 ○ 半分ずつに分かれて鑑賞し合った後、その場で感想を発表させる。その後、「おもしろい!」「カッコよかった!」等の理由を学習カードに書かせることで、表現のおもしろさを実感できるようにする。

9 本時でめざす子どもの姿

写真を光の中で真似したら、とつてもかっこよかった！
 ちょっと斜めを向くだけで、かっこよくなったから、びっくりしたよ。 【思考・判断】



実際に共同研究者間で教材の模擬実践を行ったところ、大人でも「すごく考えながら切り抜いた」「黙々と没頭してしまう」「なぜこれを切り抜いたのか話したくなる」活動であった。平岩小中学校の実践においても、切り抜いた写真（エピソード）を持ち寄った状況から授業がスタートしたことで、導入から、活発に話し合う子どもたちの姿を見ることができた。

平岩小中学校の実践を通して、反転授業が言語活動を充実させることと、ダンスの反転授業における新聞記事（メディア）活用の有効性を示すことができた。

授業アドバイザー（高橋）のフォローアップを以下に示す。

スポーツやスポーツ選手を模倣する活動に関心を示す子ども、プロジェクターの光（照明）で区切られた空間とそこにどのように存在するかに関心を示す子ども、光と影の面白さに関心を示す子ども、光の中での友だちとの関係性に関心を示す子ども、光の中への入り方・光の外への出方に関心を示す子ども、ことばを越えたからだが語る世界に関心を示す子ども等、それぞれの児童が、活動に仕掛けられた「何を」おもしろがっているのか、「何に」驚いているのかが、子どもたちの発言（問い、提案）やつぶやき（感想）、行動等に現れた授業であった。また、そうした友だちの気づき（学び）や、それが次々起きる過程を、自分と同様にみんなも楽しいと感じているそのことが、楽しい・うれしいと、子どもたち自身も先生も感じている（共有）ことが、発言（賛同）やつぶやき、行動等から読み取れる授業であった。

ダンスの技能としては、捻る、曲げる、斜めに立つ等、いろいろな立ち方（存在の仕方）ができるようになったこと、知識としては、正面を向いて直立するよりも、捻る、曲げる、斜めに立つと「身体は語る」ことを発見したこと、恥ずかしさは、見られていることを意識するからで、意識しなければ恥ずかしくないということに気づいたこと等である。そして、この2つの発見したこと、気づいたことを、さらにいろいろな立ち方を試してみるという積極的な学びにつなげたことである。



写真3：芸術表現教材「キュッパの体育館」の授業実践（平岩小中）

4. おわりに

「創作ダンス」の指導を苦手とする教員が、学校現場には多く存在する。私（野邊麻）の周りも例外ではなく、指導に自信のある教員は極めて少ないと実感している。よって、指導を苦手とする教員と、「創作ダンス」をどのように指導すればよいのかについて、話をする機会がしばしばあるのだが、その際に感じるのは、指導を苦手とする教員は「創作ダンス」についての

思い込みがあるのではないかということである。

例えば、小学校学習指導要領解説・体育編の「表現リズム遊び」の頁には、「なりきる」という言葉が出てくる。「題材になりきったり」や「そのものになりきって」とは、「周りが見えなくなるくらい没頭して表現している姿」と思い込んでいる教員がいた。また、「全身で踊る」の意味については、「体全体を使って激しく大げさに踊る」。「跳ぶ、回る、ねじる、這う、素早く走るなど」の動きの例示については、どんな題材でもこれらの動きを取り扱わなければならない。このような思い込みに、指導を苦手とする教員と話しているとよく遭遇する。全国の学校現場で指導する教員が、領域・内容の特性を共通理解し、指導しやすくするための解説であるにも関わらず、その捉え方にそれぞれの教員の思い込みがあるとしたら、未だ指導に自信のある教員が極めて少ないことも納得である。上述のような思い込みの要因として考えられるのは、指導する教員の「創作ダンス」経験の少なさである。そうであるならば、学習指導要領から「創作ダンス」を理解するというのは、遠回り且不確実な方法なのかもしれない。本研究の冒頭で述べた、振付家・ダンサーと教員が連携したワークショップ型の授業を実施し、教員が創作ダンスを肌で感じる事が最も確実な近道であるし、子どもにとって最善の方法であると考えた。今後、「創作ダンス」離れに歯止めをかける取組としては、「学習指導要領の理解」という入り口ではなく、ワークショップ型授業の実施等、これまでとは違った入り口を提供していくことが大切なかもしれない。

「コミュニケーション能力向上事業」がスタートした2010年4月、劇作家・演出家の平田オリザ氏（当時の内閣参謀参与、コミュニケーション教育推進会議の座長）が、試行中の「コミュニケーション能力の向上事業」についてコメントしている「青年団」のHP⁽¹¹⁾を検索したことが、本研究の発端となっている。2008年に、舞踊学研究室のメンバーとアートNPO法人を立ち上げたこともあり、そのコメントの「セミプロレベルで活動を続けたい劇団が活用できる新しい制度」という一文に興味をそそられたが、それ以上に興奮した一文が、「演劇、ダンス等の表現手法を用いた、計画的で継続的なワークショップを実施する取組」であった。これで、「コミュニケーション能力」あるいは「ワークショップ」という文言が踏み板となり、これまでは創作ダンスに興味・関心を示さなかった、あるいは示す必要性を強く感じていなかった教員が、身体表現や創作ダンスに目を向ける・向けざるを得なくなるのではないか。あるいは、リズム系のダンス一辺倒になりつつある教育現場において、創作ダンスの特性を再認する教員が増えるのではないか。そうした時に、これまでのダンス教材と差別化を図った、あるいはコミュニケーション能力の向上に資する仕掛けをプラスした芸術表現教材の充実が必要となる。これが、本研究の背景であった。

平成28年度からは、「外部講師（芸術家等）の活用」という観点から実践研究を行い、芸術表現教材の開発を継続する。

注・引用文献

- 1) 文部科学省「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」については、コミュニケーション教育推進会議審議報告「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組」(2012)にて報告されている。
- 2) 「コーディネーター実施方式」については、文部科学省初等中等教育局教育課程課の「平成27年度児

童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験（芸術家派遣）実施の手引き<コーディネーター用>」（2015）に、「学校申請方式」との違いが詳しく説明されている。

- 3) 「特定非営利活動法人等申請分」については、文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室「平成27年度文化芸術による子供の育成事業—芸術家の派遣事業—<特定非営利活動法人等申請分>実施の手引き（特定非営利法人等団体用）」（2015）に、「学校公募型」との違いが詳しく説明されている。
- 4) 「気がつきゃほら！ダンス」シリーズは、はじめて美的創造的運動体験にチャレンジする子どもたちのために、2002年に、ダンスグループ「踊るスポーツマン」が企画した教材集である。教材は、高橋の原案から、高橋とんまつーポス（児玉、野邊壮）が共同で教材化した。毎年新しく開発した教材の中から、実践を経て評価の高かったもの（2～11）を追加して現在に至っている。
- 5) これらの文言は、松本千代栄「こどもと教師とでひらく表現の世界」大修館書店（1985）の中で使われている。
- 6) 2014年11月23日に宮崎県立芸術劇場20周年記念イベント「開館日フェスタ」が開催され、その中で仕掛けるダンスフラッシュモブの振付の依頼をんまつーポスが受けた。
- 7) 国際舞台芸術祭「フェスティバル／トーキョー（F/T）」が、井手茂太氏、白神ももこ氏、KENTARO!!氏等の芸術家を企画者としたダンスフラッシュモブ（F/Tモブ）を実施しており、動画はyoutube等で視聴することができる。
- 8) 東京都美術館にて、展覧会「キュッパのびじゅつかん -みつめて、あつめて、しらべて、ならべて-」が開催された（2015年7月18日～10月4日）。この展覧会は、オーシル・カンスタ・ヨンセンさく、枇谷玲子訳「キュッパのはくぶつかん」福音館書店（2012）を入り口としながら、アーティストのコレクションを紹介している。
- 9) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」平成20年1月7日、53-54
- 10) 反転授業については、東京大学大学院情報学環准教授の山内祐平氏が、2013年9月24日の朝日新聞「『授業、まず家で』試行へ 動画見て予習→教室では応用 佐賀・武雄市が『反転授業』」で詳しく述べている。 <http://www.asahi.com/shimbun/nie/kiji/kiji/20131004.html>
- 11) 2010年4月1日に青年団、主宰者からの定期便の中で、平田オリザ氏が「新年度にあたって文化政策をめぐる私の見解」について述べている。 <http://www.seinendan.org/>,
- 12) 高橋るみ子・豊福彬文・野邊麻衣子、他「小中一貫教育支援：コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス学習の成果と課題～宮崎大学教育文化学部附属学校の取組～」宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要21号、2013、141-157
- 13) 高橋るみ子・児玉孝文・野邊麻衣子「演劇、ダンスの芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進～ダンス及び舞踊教育からの検討」宮崎大学教育文化学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術科学、24、11-33